

---

# 夢で巡り逢えたなら

青海空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢で巡り逢えたなら

### 【Nコード】

N2708P

### 【作者名】

青海空

### 【あらすじ】

夢を見た。

そこには、僕が見たこともない女の子がいて……

## (前書き)

初めまして。青海空と申しますm ( ( m

初投稿です (< ω >)

最後まで読んでいただけたら、とても嬉しいです ( ^ ^ )

夢を見た。そんなことは当たり前。

その夢は、見たこともないような場所にいる夢だった。それもよくある。

だが……見たこともない女の子と出会ったのは、初めてだった。

気づけば僕は、緑広がる草原の上に立っていた。標高が高いのか、目前にはいくつかの入道雲が山岳の頂上付近に鎮座している。

吹き抜ける風もひんやりとしていた。

そして……

僕は一人の女の子と出会った。いや、この状況ではまだ僕が単純に見つけたただけなのだが。

———見たことのない女の子だった。

薄く茶色がかった髪が肩に少しかかる程度にまで伸びていて、その髪を女の子は手で掬っていた。その純白な手で……

白い肌に、薄い桃色の唇。すらりと伸びた白い腕に白のワンピース———

女の子のほとんどが純白だった。その娘こを見ているだけで胸がドキドキしてきた。

……正直言おう。

その女の子は、本当に可愛かった。

見つめられただけで、おそらく僕は何も言えなくなってしまうだろう。

女の子は僕の存在には気づいていないようだった。

遠くにある灰色の雲で覆われた山岳の方角をじっと見つめている。  
「！」

突然、風がブワリと吹き抜けた。咲いていたタンポポの綿毛が風

と共に舞い上がる。

それと同時に女の子のワンピースもふわりと舞い上がる……って、おい。

僕は慌てて視線を逸らす、僕の瞳には純白なパンツがくつきりと焼き付いていた。頬がカーッと火照るのを感じる。

「見た？」

「え？」

視線を上げると女の子は僕を見ていた。頬が微かに朱に染まっている。

つまり、女の子が言った「見た？」は「何を？」なんて聞き返すまでもなく……

「うん……」

と馬鹿正直に頷いてしまう僕だった。

「……エッチ」

女の子は僕の方に寄ってきた。僕はたじろぐ。

もしかしてはたかれる……？

そんな不安が僕の脳裏を過ぎった。

女の子が僕の目の前に来て手をあげた。僕は咄嗟に目を瞑る。

「……………」

しかし、いくら待っても僕の頬がはたかれることはなかった。

恐る恐る目をひら……

カツッ。

「痛っ」

瞬間、僕は額に鋭い痛みを感じた。

女の子が手を前に突き出し、中指がピンと伸びているのをみると、どうやら僕はデコピンされたらしい。

「エッチ」

再び女の子は言った。

「見えちゃったもんは、しょうがないだろ」

デコピン（しかも意外と痛かった）を喰らった上に、二回も変態

扱いされた僕は流石にムツときて言い返す。

「あ、言い訳く？ 男の子だったら素直に謝りなさい」

女の子はビシッと人差し指を僕に向けた。そんな一つ一つの仕草が可愛くて……

先程の怒りなど、ブラックホールに飲み込まれたかのごとく一瞬で消失し、顔が朱くなるのを感じた。

「ん？ 顔赤いよ？ どうかした？ ……まさか私に惚れた？」

女の子はいたずらっぽく、僕を挑発する。

「うん。惚れた」

だから僕は臆する風もなく、挑発に乗ってやる。

「……なんでそこで素直に頷いちゃうのかな」

自分で聞いたいて自分で恥ずかしくなったらしい。女の子は僕から目を背け、再び例の山岳の方角を見つめた。

これでおあいこだな。

僕はその女の子の隣に立って、同じ方角を見つめる。

「ねえ……」

「ん？」

「名前、何ていうの？」

女の子は、横目で僕の様子をちらちら覗ながら尋ねた。

「修一」

「しゅういち？」

「そう」

「あはは。しゅうくんだね」

「しゅうくん？」

今まで一度も呼ばれたことのない呼び方をされ、思わず聞き返してしまった。

「そ。しゅういちくんだから、縮めてしゅうくん。……駄目かな？」

「いや、別にいいけど」

「ホントに？」

女の子はサファイア色の瞳をより一層輝かす。

そんな顔されたら誰だって断れないだろう。

僕は頬を軽く掻きつつ「ああ」と頷いた。

「やった！ ……しゅうくん」

「なに？」

「呼んでみただけ」

女の子はえへへと笑う。

「そう。……ところで君は何て言うんだ？」

「……………」

「？」

すぐに応えてくれると思っていた質問に対する応えは返ってくる  
ことがなかった。

「どうしたの？」

「私ね……名前がない」

「は？」

「私には名前が存在しないの。今までずっと、この誰もいない世界  
で生きてきたから……誰からも私は呼ばれることがなかったから」

女の子は俯きながら自分の境遇を語る。その横顔は最初に見たと  
きと同じ表情だった。

「……………」あの、悲愴に暮れた顔。

「名前、つけてあげよっか？」

「ほえ？」

女の子は顔だけ90度回転させ、僕を見た。女の子の顔を見つめ  
るのが恥ずかしくて、逆に僕が女の子から目を逸らし山岳を見つめ  
た。そしてそのまま続ける。

「名前ないんでしょう？ だったら僕が名前つけようか？ ずっと、

『君』って呼ぶのも嫌だし」

「……………」ほんとに？」

「うん」

「じゃあ……しゅうくんが付けた名前が気に入ったらそれにする」  
むむ。それは僕のセンスが問われるということか。

僕は女の子の方をチラッと覗く。女の子は目をシリウスのように輝かせ、僕のことをジッと見ていた。僕が考える名前に相当期待している見える。

どうしようか………そういえばこの娘、全体的に白いんだよね。髪と目は違うけど。

白くて可愛い……

「白愛<sup>はくあ</sup>」

「え？」

「白愛はどう？」

白に愛と書いて白愛」

「白愛……」

女の子は顎に指をあてて何やら考え込んでいる。

微妙だろうか？

確かに白愛って何だか中国人みたいだもんな

……

「駄目かな？」

僕は女の子の顔を覗き込む。

「ううん！ 白愛、凄くいい！」

「ホント？」

女の子はパーツと明るい顔になって子供のように嬉しそうに言った。

「ありがとう、しゅうくん！！」

「うわっ……！」

白愛は突然、僕に飛びついてきた。小さな白愛の体を受け止めると、その体温が伝わってきて心臓が破裂しそうなほどバクバク鼓動する。

えと………こういう時ってどうすればいいんだ……？ 手とかどこに置けば……

僕の腕は、白愛の背中から少し離れた位置を彷徨っていた。

白愛の髪から出ているであろう、甘いクリームのような匂いが僕の鼻腔をくすぐる。

さらに、ワンピース一枚という布地でしか白愛の地肌は守られて



いない。だから、白愛の女の子にある柔らかいものが僕の胸に伝わってしまうわけで。

これはまずい……いや、いろんな意味でこれはまずいだろ……

今はまだ理性が勝っているが、ずっとこのままだったら理性が崩壊する恐れがある。崩壊したら……なんて考えただけでゾツとする。

僕は白愛の肩をつかみ、自分から引き離れた。

名残惜しい気持ちはあるけれど……

「そ、そんなに良かった？」

僕は邪な気持ちを紛らすために話を元に戻した。

「うん！　すごくいい」

邪な気持ちなど、白愛の喜ぶ顔を見ていたら消えていったが。

僕は自分が付けた名前がここまで気に入られるとは思ってなかった。なので、照れて白愛から目を逸らす。

「……そろそろ時間かな」

「え？」

が、白愛の言葉ですぐに白愛の方に向き直る。

「そろそろ、しゅうくんの夢が解けちゃう」

「ごめん。意味がわからないんだけど……」

白愛の顔はまたも悲しそうな表情だった。

どうして……どうしてそんな顔をするんだろう。せつかく笑ってくれたと思ったのに……

「ここは、人々が見る夢の世界——通称『ドルシー』。人々が見る夢の世界。そしてここもその中の一つ。でも、ここにくる人は今まで一人もいなかった。よくわからないけど、ここには人は来れにくいみたいなの。しゅうくんが初めてだったんだよ？」

白愛は、笑顔でこの世界の説明をした。その笑顔は、作り物だったけれど。

「夢の世界って……夢って、あの寝てるときに見る夢？」

「うん」

これが夢なんだということは初めから気づいていた。

でも、白愛に会ってそのことをすっかり失念していた。いや、違  
う……

僕は――――

僕は、これが夢だと思いたくなかったのだ。

白愛みたいな可愛い娘と出会って、話してみると意外と子供っぽ  
くて……

そんな白愛と過ごした今までの時間が、夢だなんて思いたくなか  
った。ずっと白愛の笑顔を見ていたかった。こんな毎日がいつまで  
も送れたらいいと願っていた。

でも……

「夢」は覚めるものだ。

例えばどんなに長い時間夢を見ていたとしても、いつかは必ず覚め  
る。

「やっぱり、これは……夢なんだね」

ポツリと零したその言葉に白愛は「うん」と頷く。

「大丈夫――――」

「大丈夫なわけない！」

僕は白愛の根拠のない言葉につい叫んでいた。叫んでからしまっ  
たと思ったが、いまさらもう遅い。僕は拳をギュッと力強く握った。  
涙が自然と頬を伝った。

「大丈夫だよ、しゅうくん」

「！」

突然、拳を暖かくて柔らかい感触が包んだ。

「白愛……」

白愛は僕の拳を両手で覆っていた。白愛は幼い子供をあやすよう  
に優しく微笑んだ。

「大丈夫。確かに夢はいつか覚めるもの。でもね……覚めたのなら、  
そこにはまた世界が広がっている。現実という世界が」

「でも！　そこに白愛はいない」

「うん……」

「だったら何が大丈夫……！」

顔を上げれば、そこには絶対的な確信を持った白愛の瞳があった。「ドルシーの世界に来る人々は、心に何らかの傷を負った人々。しゅうくんも、きっと傷を抱えているからここに来た。私たちドルシーの住人の仕事は、その人たちの傷をいやすこと。だから」

白愛はそこでとびっきりの笑顔の花を咲かせた。

「目を覚ませばそこには傷が癒えたしゅうくんがいる」

「そんな保障どこにも……」

「ううん。いるの。ドルシーにきた人々は、その住人と出会って話をすると傷が癒える……それはこの世界の摂理なの」  
諭すように白愛は説く。

——先日、僕の弟が交通事故で亡くなった。

弟は本当に素直な優しい奴で、絶対にわがままを言わなかった。

僕は兄として、そんな弟にわがままを言ってほしかった。また、それを叶えたかった。

でももうそれを叶えることはできない。

……そうか。だから僕はここに来たのか……

「大丈夫。しゅうくんが心に傷を負ったらまたここに来る。それにしゅうくんが起きた時には、この世界であつたことを全て忘れているから」

全て忘れる？

この世界であつたこと全て忘れられてしまうのか？　ここに来た人々に。

ただでさえ、誰もいないこの世界で過ごしてきたというのに、誰の記憶にも残らないなんて……そんなの……

「そんなの、悲しすぎるよ……」

「大丈夫。慣れてるから」

まさか……

「僕は前にもここにきているのか？」

「……………」

白愛はその質問には答えなかった。

「もう夢がとけちゃう……バイバイ！　しゅうくん！」

「待って！　白愛！」

ブワッ！

刹那。強烈な突風が吹きぬけた。

駄目だ。目が開けられない……！

本当にもう僕は夢から覚めるのだろう。

なぜだか、そんな確証があった。だったら……！

「白愛！　ありがとう……！　僕は白愛が好きだ————！」

ビュンビュン吹き抜ける風の嵐の中。白愛に届くようにと、最後に僕は叫んだ。

そして、僕の意識はブラックアウトした。

#

「馬鹿……」

白愛は修一の最後のお礼と告白が聞こえていた。

「しゅうくんは忘れられるからいいけど、私は忘れられないのよ！

それなのに……！」

修一は今までもドルシーに3回来ていた。今回で4回目である。

「私だっとしゅうくんのことが好きなのに！　……私だって言い

たいのに……！」

しかし、叶わない恋だとわかっているからそれは出来ない。

白愛にできるのは、修一が再びここに来た時、初めて会った風を

装い話すことだけだ。

（でも……これでしゅうくんの傷が癒えるなら、嬉しい）

白愛はそう思うことで何とか自分を支えてきた。

（しゅうくん……私に名前を付けてくれた……）

修一は今までここに来た時、『白愛』という名前など付けずにそのまま帰ってしまった。だが今回は付けてくれた。本当にゆっくりだが、自分たちの仲は着実に進んでいる。

そのことが白愛にとっては凄く嬉しかった。

白愛は再び遠くにある山岳を見つめる。

その横顔は……

修一がこの世界に来て、最初に見た表情、ではなかった。どこか嬉しそうで、少なくとも悲愴に暮れてなどいない。

白愛は待ち続ける。

修一が再びこの世界に来ることを。

例えば自分のことを覚えてなかったとしても、自分たちの仲が着実に進み、また、好きと言ってもらうために。

そして、いつしか修一が自分のことを忘れないという奇跡が起こることを祈って………

## (後書き)

最後まで読んでくださった方、ありがとうございます！

どうだったでしょうか？

感想、批評書いていただけると嬉しいです（＾Ｏ＾）／

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2708p/>

---

夢で巡り逢えたなら

2010年12月3日19時40分発行